



(新編) 幸福な結末



柳裕樹

午前二時

「会いたい。」

という言葉の語源は、

実は、

「ああ、痛い。」

という事に気が付いた。

三十四歳（当時）

例えば、
貴方が、
六時間程、
眠った夜、
僕が、
三時間しか、
眠らなかったら、
差は、
三時間分、
縮まる。

そんな計算式は成り立ちませんか。

祭りの後

祭りの後の静けさに、
何だかとても寂しくなって、
誰かの声を聞きたくなった。

出る筈のない番号を、
押しては途中で取り消して、
結局、一人で我慢した。

楽しさと寂しさとは、
きっと裏と表で、
叶った願いの大きさだけ、
余分な悲しさを背負う。

そう自分に言い聞かせるのは、
日に焼けて赤くなった、
この手を、
許せなくなったから。

風が強過ぎた日の午後

胸にナイフが突き刺さったままで、
暮らしているような感覚は何だろう。
誰に迷惑を掛けた訳じゃない。
だけど申し訳が無い思いがした。

明日思いがけず僕は死ぬかも。
だから今日をもっと真剣に生きてみるかな。
日記は書かないといけないと思うけれど、
たった一行で終わる日々に嫌気がさした。

僕は曖昧に君を包んで、君は不器用に僕を切り裂いた。

風が強過ぎた日の午後は、
空に雲が残れずに、
影がその背の高さを競い合っていたよ。

近づく事で何か分かるとしたら、
それはその人の醜さだけかもしれない。
目に映るものが全てだとは、
信じたくないから瞼を下ろした。

僕は曖昧に君を包んで、君は不器用に僕を切り裂いた。

風が強過ぎた日の午後は、
空に雲が残れずに、
影がその背の高さを競い合っていたよ。

魔女狩り

痒くもない腹だったけれど、
「イタイ。」と言ってみたら、
黒く染められて、
僕は火に炙られる。

五月の太陽

被害妄想の強い五月の太陽は、
恋心さえも憎しみに変えて照り付ける。

その肌に赤いシミができたら嫌だな。

無駄花

笑ったら駄目、という遊び、
今日も、
君は続けるつもり。

そうでもなければ、
無料で振り撒かれている、
真実も、偽りも、
拒む理由がないから。

壊して、と、君は言う。

笑ったら駄目、という遊び、
明日も、
君は続けるつもり。

血を流す痛みさえ、僕ら忘れてしまったんだ。
涙流す暇さえ、僕ら無くしてしまったんだ。

生存術

寂しさに任せてメールを送る。
返事はなくても良い。
でも、
あるに越したことはない。
例えば、
それが嘘であっても構わない。
ただ、
大事にされている、と、
錯覚したいだけなのだ。
更に言えば、
嘘と分かるような、
下手な嘘ほど良い。
何故なら、
真に受けなくて済むから。
そして、
何よりも、
人は、
どうでもいい人に対して、
嘘などついたりしないから、
逆説的に、
大事にされている、と、
錯覚できるのだ。
それは、
正誤とは別次元の、
処世術、
いや、
生存術。

青い絵の具

青い絵の具で顔に描いたら、
空を飛べるような気がした。

高層ビルの展望台から、
君の部屋に向けてピースサインする。

道路の上に寝転がったら、
強くなったような気がした。

赤いスニーカーの白ラインは、
こんな僕さえもハイにする。

誰かから届いた写真には、知らない女が裸で笑っていた。
きっと明日は雨だろう、そう言う君はそう願っていた。

青い絵の具で顔に描いたら、
空を飛べるような気がした。

高層ビルの展望台から、
君の部屋に向けてピースサインする。

紫陽花

歩道脇の花壇に咲いた、
紫陽花が、乾涸びて焼けていた。
僕は、飲みかけのソーダをかけた。
花びらの上で、泡が弾けた。

昨日まで望んでいたものさえ、
手に入ると、疎ましくなってしまう。
そうだとすると、
君の理不尽に付き合う、という、
そんな義務は、僕には無い筈。

汗を掻いていた日々を、照れ臭く笑う。
その汚れた前歯が、夕闇に浮かんだ。

神の手

優しくされたら、
戸惑った。
くすぐったくて、
逃げ出した。
まだ、
痛い方がマシ。

要らない。
祈りの前に、
寄付をせびる、
神の手。

ツマラナイ男

ガラスの眼鏡が割れた、
胸ポケットから地面に落ちて。
一緒に僕の心も落ちて、
僕はもぬけの殻。

何が欲しいのでもなく、
何がしたいのでもなく、
ただ、
日課をこなす毎日。

僕は馬鹿じゃないから、
悲しい奴、と自覚する。
貴方の期待に添えないのも、
そのせいなのかもしれない。

誰が欲しいのでもなく、
誰としたいのでもなく、
ただ、
妄想に耽る毎日。

ガラスの眼鏡が割れた、
胸ポケットから地面に落ちて。
一緒に僕の心も落ちて、
僕はもぬけの殻。

こんな気持ちの良い天気の日

こんな気持ちの良い天気の日、
貴方に会えない事が、
哀しい。
貴方に渡そうとした絵本を読んで、
なお哀しい。
たった二駅先が、
どこか別の国のように感じられる。
電車内では、
子供が泣いている。
僕は子供の泣き声が嫌いだ。
営業の、
成約を目前にして上気する声も。
ついでに言えば、
現役を退いても維持され続ける、
スポーツ選手の肉体には、
生理的に嫌悪を覚える。
スポーツ観戦はまるでしない。
テレビを持っていないし、
別に金が無い訳じゃなく、
血が踊るのが苦手なだけだ。
それなら呑みに出掛けた方が良い。
行ってみたいバーもあるし、
そこで色々な情念に塗れるのも良い。
腹が減ったら適当に店に入ろう。
牛はもう平気か。
鶏も、鯉も、もう問題ないか。

まあ、どうでもいい。
そんな事はどうだっていい。
ただ、
こんな気持ちの良い天気の日、
貴方に会えない事が、
哀しい。

夕暮れ

誰も見ていない、
と
思っ
て、
君を呼んだら、
犬が見ていた、
電柱の影で。

夢であるように、
と祈って、
頬を抓ったら、
ただ痛かった、
公園のベンチで。

そんな夕暮れ。
今日はそれまでの日。

世界

僕が口を開けば、
誰かがどこかで泣いて、
或いは、
誰かがどこかで怒って、
均衡は崩れていく。
でも、
大した意味は無いさ。
だって、
十秒後には、
新しい均衡が生まれるから。

にわか雨

にわかにか雨が降って街を濡らした。
埃を鎮めて洗い流した。
僕はその中で傘をささずに、
この汚さをも洗い流そうとした。

雨上がりの空が、
どこまでも青く澄んでいるから、
居場所を無くして、
僕は抗わずに消え去るだけ。

きっと今日は。
多分、明日こそ。

雨上がりの空が、
どこまでも青く澄んでいるから、
行き場を無くして、
僕は躊躇わずに消し去るだけ。

その前に、
一目、君を見て。

someday

someday

さあ出掛けよう、
もっと遠くへ。

someday

さあ出掛けよう、
もっと近くへ。

あの日、
二人で名付けた雲は、
何処の空へ。

いつか、
二人で見付け出すのが、
僕の夢。

有罪

信じていないのは、
自分自身の事。
それだけで、
十分に有罪。

そんな奴が何か祈っても。
そんな奴が何回祈っても。

信じていないのは、
自分自身の事。
それだけで、
もう十分に有罪。

ステンレス製の計量カップで

ステンレス製の計量カップで、
僕は何を計ろうか。
無能な僕の才能を、
醜い僕の容貌を、
疚しい僕の欲望を
乱視の僕の視野視界、
軽そうな僕のお財布を。

満たせないから満たされないのか、
満たされないから満たせないのか。

実は、
一つ、試してみたいものがあるのです。
でも、
錆びる筈の無いこのカップが、
万が一にでも、
錆びてしまっは困るので、
躊躇っているのです。

奇跡

奇跡を待っていたら、
置いてきぼりにあったんだ。
追いつく為に、
もっと、
奇跡を待ったんだ。

隣で泣いていた人は、
もう笑っていて、
訳も分からないまま、
僕はつられて笑う。

奇跡を待っていたら、
置いてきぼりにあったんだ。
追いつく為に、
もっと、
奇跡を待ったんだ。

隣で笑っていた人は、
また泣いていて、
訳も分からないまま、
僕は空を見上げた。

欲しい物は、欲しい、と言わないと、
伝わらない、と言うから、
告げたら、
自分で何とかしなさい、と。

だから、僕はこうして、

奇跡を待っていたら、
置いてきぼりにあったんだ。
追いつく為に、
もっと、
奇跡を待ったんだ。

葬送

犯した罪は、
別の罪で、
上から塗り潰せば良い。
そうやって、
保たれた正気は、
どれだけのものなのか。

呼ぶ声が聞こえた。
その度に、目を覚ましていたら、
誰かの歌は、
どこまでも終わらずに続いていく。

癒されよう、
虫のいい期待はしていない。
どうせなら、
君のその手で、
葬って下さい。

呼ぶ声が聞こえた。
その度に、目を覚ましていたら、
誰かは歌を、
どこまでも終わらせず続けていく。

思い出なんて欲しくはないから。

幸か不幸かは他人の決める問題ではない

今夜もまた、
上階の部屋では、
女が殴られている。

午前三時二十六分四十二秒

甲高い怒声が、
殴打の度に詰まり、
やがて消え入る。

閉まるドアの音

幸か不幸かは、
他人の決める問題ではない。
世の中に、
いや、
六畳一間にできえも、
一人放り投げられる事の方が、
救いの無い場合が少なくない。

女は、
シャワーを浴び、
そして、
自嘲した。

幸か不幸かは、
他人の決める問題ではない。
しかし、
この女は不幸だ。
僕が言い渡してあげます。

夢なんて見ませんように

朝、一駅寝過ごした。

昼、歯科医に奥歯を削られた。

夜、一駅寝過ごした。

今なら、

誰に優しくされても、

戸惑わない気がします。

危ないので、

まだ早いですが、

眠りに就こう、と思います。

ただ、

夢なんて見ませんように。

夜明け前

僕の中で、
君が死んで、
誰かが、
僕を笑う。

弾けた物が、
元の形を、
作れずに、
積もる。

思い出せないよ。
何を選んだか。
代わりに、
捨てたものだけが、
目の前で踊る。

どこからか、
水が浸みて、
塵と塗れて、
朽ちる。

思い出せないよ。
何を選んだか。
代わりに、
捨てたものだけが、
目の前で踊る。

光

息をすることさえも、
どこか義務感に拠って、
上手くこなせないから、
居心地の悪い世界。

さっきまで頼りにしていた、
理念は覆されて、
固執する余りに、
僕は取り残された死骸。

そんな目で見たりしないで。

暗闇に慣れたこの目には、
要らないそんな光。
意識を霞める程に迄、
晒された白色。

現在の僕には

湿った風が吹いて、
僕の心は錆びた。
オイルを注すだけでは、
直ぐに、
また軋んでしまう。
いっその事、
全て錆びて、
それを鎧に纏って、
誰にも侵されない、
頑なに心も悪くない。
現在の僕には。

ただこうして、
一秒過ぎる度に、
願いとは裏腹に、
鮮やかさを増していく、
少しも甘くない、
むしろ、
目も当てられない、
閉じ込めた筈の記憶。
まだ早くて痛いよ、
そんなもの。
現在の僕には。

散歩（星が綺麗です。）

言わなければ、
何も伝わらない。

逆に、
言い過ぎると、
嘘っぽくなってしまふ。

こんな時間に、
散歩に出てしまったのは、
君に告げた言葉が、
決して嘘ではないことの表れ。
そう受け取っては頂けませんか。

捨て犬

君がその無邪気さで、
幾つもの心を殺めたとしても、
君の無罪を声高に僕は歌う。
ありふれた言葉で君を慈しもう。
それでも何か足りないようなら、
この身をもって、その隙間を埋めよう。

もう眠らなきゃいけないと、
君の唇が離れていく。
僕らはいつまでもあの時のままで、
笑ってられる、とっていました。
僕らはいつまでもあの時のままで、
泣いてられる、とっていました。

そんなに、勝ちたい、と言うのなら、僕が負けてあげる。

幸福な結末

猫背が祟って、鳩尾辺りが痛い。
針千本刺さったら、こんな痛みかな。
一寸した事が、君への嘘へと変わって、
それから痛み出したのさ、僕のここ。

論理的に、筋道を立てて、
話をするのは、苦手だから、
何を言ってるのよ、と、思われるのも嫌だし、
そのまま黙ることにしたのさ、僕の事。

あの日の僕には、見た映画みたいに、幸福な結末しか、見えていなくて。

後悔が無い、と、綺麗事は言えない。
むしろ、悔やむばかりで、一步も進めない。
部屋は、乱雑に散らかったまま、
止めようとしても、時は往く。

本音で語っても、最後に茶化して、
全てを有耶無耶に、煙に捲き、
何も言っていないのと同じ事だし、
結局、投げ出しているのさ、何もかも。

本当は初めから、気が付いていた。幸福な結末など、有り得ない事を。

上手く寝付けない、そんな夜には、
彼是と、思いを廻らせる。
化けの皮が剥がれるのが、怖い。
孤独に苛まれ、朝は遠い。

そんな朝には、君に会いたい。
自分勝手に、触れていたい。
何をやってんのよ、と、呆れた声で、
そのまま許して欲しいのさ、僕の事。

（新編） 幸福な結末

2011年8月23日発行

著者 柳裕樹

運営会社 株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ <http://p.booklog.jp/book/32401>

ブックログのpapier本棚へ入れる <http://booklog.jp/puboo/book/32401>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)